



執筆者:マーケット・プレイス・オフィス代表 立澤 芳男(たつざわ よしお)

流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案など、都市、消費、
世代に関するマーケティングの情報収集と分析

元「アクロス」創刊編集長。著書に「百万人の時代」(高木書房)等

2008年11月

第6回 今(いま)どきの中高生

平成生まれ平成育ちの新・新人類！人間ロボット化した中高生。

今月(11月)20日、文部科学省の「平成19年度児童生徒の問題行動等についての調査」結果が発表された。そこでは、小中高校生の暴力やいじめについて調査がされているが、暴力行為は前年度比8千件増の5万3千件に上り、過去最多を更新。世代別では、中学校が3万6803件、高校1万739件、小学校5214件で、暴力行為の中身は、物を壊す行為(1万5718件)、教職員への暴力(6959件)が続き、「キレる」傾向が一段と裏付けられた。また、校内暴力が発生した学校は高校で53.6%(前年度比5.6ポイント増)に及び、比較可能な9年度以降の統計で初めて半数を超えた。

また、21日の内閣府による「2008年版・青少年の現状と施策」(青少年白書)が発表されているが、中学校の生徒数に占める不登校生徒の割合が07年度は前年度比0.5ポイント増の2.91%(10万5328人)に上り、過去最高となったとしている。

自分の感情をコントロールできない、規範意識の低下、コミュニケーション能力の不足が、中高生の間にあるようだが、まるで統制制御不能の人間ロボットを彷彿とさせる。

ロボット化してしまった今(いま)どきの中高校生(=新・新人類)のその誕生と実態をレポートする。

目次

I. いまどきの中高生の生徒数(ボリューム)	少子社会の先鋒としてひた走る現在の中高生	p2
II. いまどきの中高生の進路	教育格差ありきでの自由選択	p4
III. いまどきの中高生の体格と運動能力	体格はれっきとした大人だが...	p6
IV. いまどきの中高生の生活意識	格差は当たり前、そこから始めればいじゃん!	p7
V. いまどきの中高生①	ゆとり教育と一貫教育に振り回される	p9
VI. いまどきの中高生②	携帯は命。自分が消耗品になりつつある	p11
VII. いまどきの中高生の非行・犯罪	二極化する中高生の非行・犯罪	p14
執筆者コメント		p17

I. いまどきの中高生の生徒数(ボリューム)

少子社会の先鋒としてひた走る現在の中高生

少子社会といわれてはや20年以上たっているが、現在の中学生は平成5～8年ころ、高校生は平成2～5年ころに生まれており、まさに少子社会と平成バブル不況時代の落とし児である。

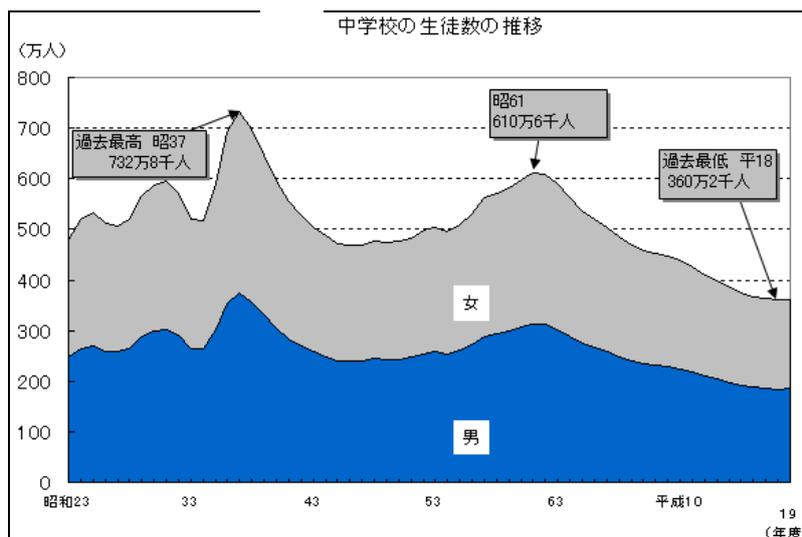
中高生とは、中学校または高等学校に在学している生徒のことを指す

1. 中学校の在校生数

昭和37年(732万人)の49%。少子化で中学生の減少傾向は続く

中学校在校生数の変遷をみると、昭和37(1962)年の732万人をピークとし減少し、その後一時は増加に転じ昭和51(1976)年に610万人まで戻した。しかし、その後は減り続け、平成19年(2007)の中学在校生は361万人(男185万人、女176万人)となった。

言うまでもなく、昭和37年前後の山は団塊世代、昭和51年の山は団塊ジュニア世代が生み出したものである。現在の中学在校生数は、昭和37年の在校生の49%と半分以下となっている。



私立中学在校生は、中学生全体の7.7%(25万人)、中高一貫教育志向で様変わり

現在の中学生と団塊世代とそのジュニアとの違いは、私立中学校の存在である。

文部科学省の後押しもある中高一貫教育の進展もあるが、私立の在校生数は平成19年の全中学生(361万人)の7%の23万人となっている。中高一貫教育も進む中、小中高生の教育格差問題も生じ始めている。

*いずれのデータも

文部科学省「学校基本調査」

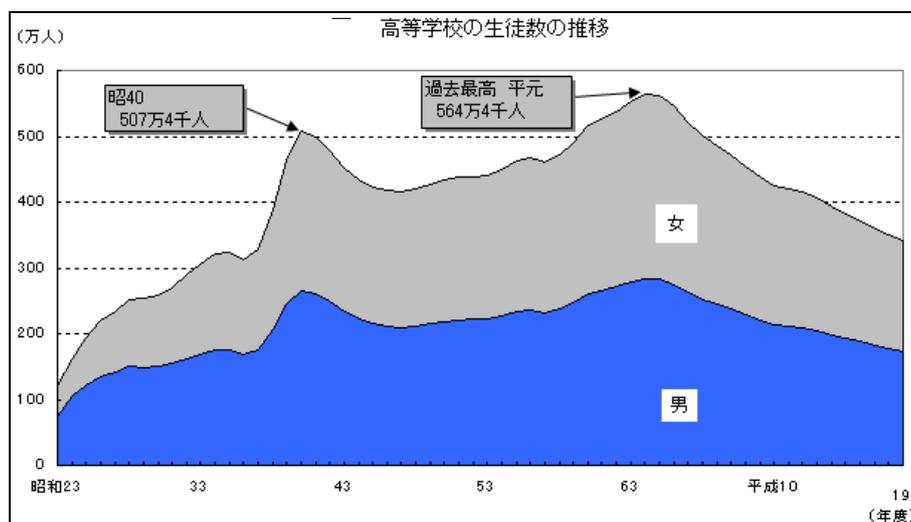
	計	私立	割合
昭和30年('55)	5,883,692	181,979	3.1%
35年('60)	5,899,973	207,903	3.5
45年('70)	4,716,833	142,198	3.0
55年('80)	5,094,402	149,740	2.9
平成2年('90)	5,369,162	202,603	3.8
12年('00)	4,103,717	234,647	5.7
19年('07)	3,614,552	253,793	7.0
同上男	1,847,809	118,387	6.4
同上女	1,766,743	135,406	7.7

2. 高校の在校生数

高校進学率 97%を超えているのに、在校生は減少中。やはり少子化の波…。

高校在校生の推移の経過の形は中学在校生の推移と同様だが、昭和 40(1965)年と平成元(1989)年に高校の在校生のピークの山ができています。但し、高校在校生の最大の山が平成元年(564 万人)にあり、それが団塊ジュニアが高校生であったということである。

これは、団塊世代の中学から高校への進学率が約 70%に対して、団塊ジュニアの高校進学率が 95%となっていることが大きく影響している。その進学率は平成 17(2005)年以降は、97%と高水準にある。しかし、現在(平成 19 年)の高校在学人数は、昭和 40 年以降最少の 341 万人(男 173 万人、女 168 万人)であり、団塊世代の 67%、団塊ジュニア世代の 60%である。



私立高校在校生は約 30%に。消える定時制高校生。

高校の在校生は、564 万人をピークに年々減り続けているが、私立高校生の割合は、団塊世代が高校性になったころの昭和 40 年前後に、30%台になった。年齢 15 歳人口が急激に増え国公立の高校で収容できなくなり私立の高校や大学付属の高校がそれに対応した結果であるが、高校入学適齢期の人口が大きく割り込んでも私立に在学する高校生は 30%前後となっている。一方、定時制高校の在校生は昭和 35 年に 50 万人を超えていたが、現在その 1 割となった。

*いずれのデータも文部科学省「学校基本調査」

	計(国・公・私)	私立の割合(%)	定時制	定時制の割合(%)
昭和 30 年('55)	2,592,001	19.7	541,715	20.9
40 年('65)	5,073,882	32.8	514,125	10.1
50 年('75)	4,333,079	30.2	243,382	5.6
60 年('85)	5,177,681	28.1	140,144	2.7
平成 7 年('95)	4,724,945	30.2	107,331	2.3
17 年('05)	3,605,242	29.6	110,472	3.1
19 年('07)	3,406,561	29.7	108,524	3.2
同上男	1,725,458	30.1	61,921	3.6
同上女	1,681,103	29.3	46,603	2.8

Ⅱ. いまどきの中高生の進路

「教育格差ありき」での自由選択

◆中学生の卒業後進路

進学率 97%、中卒就職者は 0.7%。中高一貫教育の波及で進学有名高校受験が激化。

今の中学生と昔の中学生との大きな違いは中学卒業後の進路にある。

昭和 35(1960)年に中卒で就職したのが 38.6%。昭和 40(1965)年の団塊世代でも 4 人に 1 人の 26.5%が就職をしており、最後の「金の卵」世代と言われ、中卒で都市・都会で収入を得るために働きはじめの少年少女は多かった。

中卒で就職する者が急激に減りはじめたのは、昭和 45(1970)年頃からで、高成長経済で所得も伸び安定するようになり、また核家族化の進展で子供の数も 1, 2 人の家族が増えた時期である。

卒業者のほとんどである 95%以上が、高校へ進学するようになったのは、団塊ジュニア世代が中学を卒業する平成 2(1990)年頃からである。この頃から、ほぼ全員が高校進学するようになり、有名進学高校へ向けての受験競争が激化し、高校受験塾が活況を呈すようになった。

—中学生の卒業後の進路—

	卒業生数	高等進学者	就職者	進学率	就職率
昭和 35('60)	1,770,483	1,022,424	633,224	57.7%	38.6%
団塊世代 昭和 40('65)	2,359,558	1,667,080	548,675	70.7	26.5
45('70)	1,667,064	1,368,898	214,174	82.1	16.3
50('75)	1,580,495	1,453,165	63,212	91.9	5.9
団塊ジュニア 平成 2('90)	1,981,503	1,884,183	39,895	95.1	2.8
平成 17('05)	1,236,363	1,207,162	7,892	97.6	0.7
現代の中学生 平成 19('07)	1,213,709	1,185,789	7,777	97.7	0.7
同上男	621,359	605,418	5,559	97.	1.
同上女	592,350	580,371	2,218	98.0	0.4

(注)1 各年 3 月卒業生である。「学校基本調査」(文部科学省)

◆高校生の卒業後の進路

ゆとり教育第一世代。将来はのんびりと考えよう。今を自由に過ごす。

高校生の高校卒業後の進路をみると、団塊世代が高校卒業期であった昭和 45(1970)年は、就職者数(80 万人)が大学等への進学者数(34 万人)を46万人上回り、進学率は 24%に留まっている。大学進学率が 30%台を超えはじめるのが昭和 55(1980)年頃で、その後大学進学率は年々上昇し、平成 19(2007)年には 50%に達している。

いまどきの高校生は、大学進学一本槍志向の強かった前の世代の高校生と大きく違う。

高校生卒業後、大学に進学する生徒は、大学進学には私立高校が優位に立っていることからわか

るように、すでに中学から高校受験時に私立進学高校入学して大学受験の準備がされている。(私立高校卒の大学進学率は61%、公立高校は47%)。

また、就職する場合は、専門学科のある高校を選び、卒業時の就職率も高い。

いまどきの高校生は、一部にある競争(有名高校受験)を除けば、供給過剰感がある高校での入学自体の選択肢も増えており、高校生の数も少なく好きなように高校が選べるようになってきている。その意味で、大学進学一本やり志向の強かった前の世代に比べ、高校入学時から自分の卒業後の進路を、大学へ進学するのか、技術が習得できる専修学校へ進学するのか、就職をするのかという三つの組み合わせで「ゆとり」を持って高校を選んできているのであり、あまり焦った姿は見られない。比較的のんびりと高校生活を送っていることがわかる。今時の高校生は、「ゆとり教育」の最初の世代であったことは言うまでもない。

—高校生の卒業後の進路—

	卒業者数	進学者	就職者	大学等 進学率	専修学校(専門課程)進学率	就職率	
昭和 35('60)	933,738	160,386	566,618	17.2%	...	61.3%	
40('65)	1,160,075	294,540	690,051	25.4	...	60.4	
団塊世代 45('70)	1,402,962	340,217	802,817	24.2	...	58.2	
55('80)	1,399,292	445,875	581,430	31.9	8.6%	42.9	
平成 2('90)	1,766,917	538,890	607,737	30.5	15.8	35.2	
12('00)	1,328,902	599,120	241,703	45.1	17.2	18.6	
17('05)	1,202,738	567,712	206,751	47.2	19.0	17.4	
現在 平成 19('07)	1,147,159	586,904	211,108	51.2	16.8	18.5	
国立	2,848	1,814	35	63.7	3.7	1.3	
公立	801,773	375,278	171,211	46.8	18.4	21.5	
私立	342,538	209,812	39,862	61.3	13.2	11.7	
学 科 別	普通	838,578	502,664	78,861	59.9	15.6	9.5
	農業	30,299	4,199	15,991	13.9	21.9	53.1
	工業	93,901	15,768	56,348	16.8	15.7	60.1
	商業	83,034	19,975	36,017	24.1	23.7	43.7
	水産	3,275	471	2,082	14.4	13.0	63.7
	家庭	16,494	3,710	6,501	22.5	26.1	39.8
	看護	4,245	3,381	284	79.6	9.7	8.1
	情報	385	196	92	50.9	21.0	23.9
	福祉	2,700	509	1,322	18.9	23.2	49.8
	その他	32,085	21,528	2,083	67.1	11.1	6.6
	総合	42,163	14,503	11,527	34.4	27.2	27.6

Ⅲ. いまどき中高生の体格と運動能力

大人顔負けの体格。スリムで足長の中高校生。運動能力は低下。

団塊世代の中高生時と現在の中高生の体格を比較すると、中高生ともに身長伸びが座高の伸びを大きく上回り、男女とも団塊世代当時の中高生よりも「足長」になっている。現在の中学生男子の身長は平均 160 cm 弱、高校生男子は 170 cm で昔の大男に属する。女子も高校生(17 歳)の身長は平均で 158 cm となっており、今の中学性が 3 年後に高校生となれば平均 160 センチメートルを超える可能性もあり、体重は抑えさえすれば全員がファッションモデルになれる可能性のある体格になっている。但し、全体的に運動能力は低下している。

—いまどきの中高生の体格—

資料: 文部科学省「体力・運動能力調査報告書」

		男・身長	男体重	男・座高	女・身長	女・体重	女・座高
中 学 13 歳	昭和 40 年(A・団塊世代)	151.7	42.0	81.7	150.3	43.2	82.6
	平成 2 年(B・団塊ジュニア)	158.8	49.0	84.3	154.7	47.5	83.6
	平成 19 年(C・現在の中学生)	159.8	49.6	85.0	155.1	47.6	83.9
	C-A	8.1	7.6	3.3	4.8	4.4	1.3
高 校 17 歳	昭和 45 年(A・団塊世代)	167.8	58.7	90.2	155.6	52.1	85.1
	平成 7 年(B・団塊ジュニア)	170.8	63.0	91.1	158.0	53.3	85.3
	平成 19 年(C・現在の高校生)	170.8	63.7	91.8	158.0	53.5	85.7
	C-A	4.0	6.2	1.8	3.2	2.3	0.6

—いまどきの中高生の運動能力—

資料: 文部科学省「体力・運動能力調査報告書」

			A/昭和41年	昭和 61 年	B/現在	B-A
中 学 13 歳	男	握力(kg)	29.3	32.0	31.1	1.8
		持久走(秒)	377.1	371.1	386.7	9.6
		50m走(秒)	8.2	7.9	7.9	-0.3
	女	握力(kg)	24.2	25.0	24.0	-0.2
		持久走(秒)	295.4	277.8	287.3	-8.1
		50m走(秒)	8.9	8.7	8.8	-0.1
高 校 17 歳	男	握力(kg)	(45.3)	46.1	43.7	-1.6
		持久走(秒)	(357.5)	358.0	379.7	22.2
		50m走(秒)	(7.2)	7.1	7.3	0.1
	女	握力(kg)	(28.7)	28.9	27.4	-1.3
		持久走(秒)	(311.8)	289.3	308.1	-3.7
		50m走(秒)	(8.9)	8.7	9.0	0.1

昭和 41 年の高等学校は全日制高等学校のみである。現在の中学生・高校生の数値は平成 18 年調査

IV. いまどきの中高生の生活意識と感覚

格差は当たり前、そこから始めればいいじゃん！

バブル経済、バブルの崩壊、平成不況突入の経済情勢の中、誕生し生まれ、小学生生活を終えたいまどきの中高生。中流意識が崩れ、迷走する日本の社会の中、育児教育、子育て教育、学校教育も大きく変わった時代でもある。幼児体験がその子供の少年時代や大人になった時の行動を決定図ける能力を育む。

今の中高生が大人になった社会はどうなるのか。

◆[その誕生・時代背景] 格差社会に突入。「腫れ物扱い」で生まれ育てられた。

現在の中学生・高校生が生まれたのは、平成 2,3 年～平成 5, 7 年ころである。その当時の日本の社会はバブル経済の崩壊に見舞われ、戦後最長を記録する平成不況のまっただ中。

親たちの生活は、賃金削減や正社員減少に見舞われている。一億総中流時代は次第に過去のものとなり、中流崩壊が話題となり、格差社会論争が注目されるようになっていった。

変わって、「所得格差」、教育による「階層化」、インターネットの進展による「情報格差」の三つの社会格差に悩まされ続ける。子育てに影響を与えないはずはなかった。

バブル経済崩壊 平成大不況に突入	成長率・前期比(%)	
	名目	実質
1989 年度(平成元年)	7.5	4.9
1990 年度(平成 2 年)	8.1	5.5
1991 年度(平成 3 年)	5.3	2.5
1992 年度(平成 4 年)	1.8	0.4
1993 年度(平成 5 年)	0.9	0.4
1994 年度(平成 6 年)	1.0	1.1
1995 年度(平成 7 年)	2.0	2.5
1996 年度(平成 8 年)	2.6	3.4

▼中流社会の崩壊と社会格差問題の浮上、荒れる 親たちの生活と意識

年	話題・出来事
1989 年(平成元年)	帰宅拒否症候群、複合汚職、土地臨調(地価高騰の沈静化、投機の排除、土地取引の適正化)、株価最高値の 3 万 8 千円を記録(12 月)
1990 年(平成 2 年)	臨海副都心計画、地球温暖化、バブル経済亀裂、土地総量規制、ノンバンク迂回融資規制、スーパーファミコン
1991 年(平成 3 年)	湾岸戦争、損失補てん、証券不祥事、金融不祥事、地価税、ヤンキー座り、キレカジ、チーマー、グリーン・コンシューマー
1992 年(平成 4 年)	佐川急便事件、インナーシティ(都心の住宅環境悪化で都心の空洞化)、カード地獄、RV車、アウトレット
1993 年(平成 5 年)	リストラ、Jリーグ・サポーター、不良債権問題浮上(土地、株の価格下落で担保不足など、50~100 兆円)、インターネット、コギャル
1994 年(平成 6 年)	援助交際、マジソン郡の橋症候群、関西国際空港、ゼネコン汚職、価格破壊、就職氷河期、「超」の時代(超円高、超失業、超倒産)
1995 年(平成 7 年)	戦後 50 年、崩壊した安全神話、阪神大震災、オウム事件、官官接待、金融破綻、無党派、変らなきや、ウインドウズ 95、PHS

◆[中高生の生活価値観と感覚] **自分自身や周囲の変化に敏感で即行動に移す。**

リッチ。合理性。スピード。直線思考。自己中心。感激派。無機質。ステータス。

1. 便利で実用的であることを最も重要視する

利用できるものなら何でも使う。その技術も持っている。親も家族も友達もコンビニも使えるものなら使ってしまう。但し自分に都合がよく、便利であるならば、である。

2. 時代の潮流に乗り遅れないことを重要視する

世の中は、否応もなくデジタル化へと突き進む流行の波が、全世界を席卷している。時代の流行の最先端でいたい。最新デザインの携帯電話、最新情報サービスを手にせず、どうして最先端を追求する「新・新人類」でいられるのか。そこに自分の存在があると信じる。

3. ステータスに憧れ、ステータスに感激する

いまだきの中高生は、イチローが、タイガーウッズが、真央ちゃんが、石井が大好きだ。世界の超一流だから好きなのだ。競争が大好きでその競争を超えるところにそのステータスがある。世界に冠たる、より良い携帯、より高価な携帯を持っているという事がリッチなのだ。彼らのリッチ感には、互いに比べ合い、競争し合うゲームに似た感覚がある。ステータスマインドがなければ意味がないと信じて疑わない。

4. 面白いこと、個性の表現を最重視するが、それは携帯電話で実現する

中高生にとって世の中で一番面白いのは携帯電話である。ショートメッセージは安く便利だし、悪ふざけやネット上のジョークは人知れずして自分の楽しみともなる。携帯でチャットをし、ゲームをし、世界中と面白い画像を送受信できるのだ。面白いことは携帯を通じてはじめて面白いこととなる。携帯抜きに面白いことはあり得ないと信じている。携帯電話は「個性の表現」そのものになっている。中高生にとっての信じる者は親でもない先生でもない。携帯電話なのである。

昔(団塊世代)の中高生は、日本の新しい消費社会の大救世主となった！

昭和30年代後半から、日本は明るく楽しい生活志向の時代に入った。その頃、消費市場においては、所得倍増・生活水準アップの主流は、世帯(核家族化が進む)での家庭電化生活の充実が優先されており、中高生市場と言うのはせいぜい学生服、学生靴・かばん、教科書、文房具という商品が販売されていた程度であった。しかし、昭和40年代に入ると、経済成長にも陰りが見えはじめ、消費市場は新たなターゲットを探しはじめた。

それが中高生(ティーン)市場であった。目の前に、年間 200~250 万人の出生数を持つ団塊世代(昭和25年前後に生まれ)の中高生800万人がそこに存在していたのである。新しい消費社会へと向かう日本にとって、この膨大な人口規模を持つ団塊世代の中高生は「金の卵」のごとく期待のマーケットのターゲットになった。その火のつくところは「ファッション」というキーワードであったことは言うまでもない。雑誌の世界も中高生市場を狙って多くの雑誌が発行された。ファッション市場では、ティーンを 13~15 歳ごろまでの年代を「ローティーン」、15~19 歳までの年代を「ハイティーン」と細分化し様々な商品を送り出した。結果、日本は自由世界第二位の経済大国になった。

V. いまどきの中高生① 一貫教育とゆとり教育に振り回される

格差社会を視野に、エリート教育に奔走する親たち。

◆「有名私立中高一貫校」在校生は、「華麗なる一族」のシンボルである

日本では前期中等教育への進学率がほぼ 100%であり、多くの小学生は自動的に中学校などの学校に進学するが、いまどきの子供たちとその親たちの私立一貫校志向は強く、テンションも高い。学校当局も、一貫教育中学校を増やしており、平成 19 年度は、併設校で 160 校、連携校で 172 校となっており、5 年前(平成 14 年度)と比べると併設校は 5 倍以上、連携校は 2 倍にも膨れ上がっており、特に中高一貫教育で有名な進学校、エスカレートで大学へ入れる私立中高一貫高への受験競争は激化している。

中高一貫校では、教育熱心でそこそこ裕福な家庭で暮らしている生徒のみが 6 年間同じ環境で過ごす場合が多く、異質な生徒は少ない。狭い世界しか知らない偏った考えの持ち主になってしまうという批判も有るが、大学進学率も高く、高い評価を受けている。

中学入試は、高校入試や大学入試と異なり、保護者と志願者の共同作業に近い。志願者本人の勉強と並行して、保護者によるスケジュール管理や健康管理、塾への送り迎え、志望校選択や出願、子供のモチベーション維持が重要となっているが、いまどきの中高生にはゲーム好き、競争好きも多く受験競争を楽しんでいる向きもある。

中学受験を控える家庭は、家族ぐるみの受験態勢といった様相を呈し、有名私立一貫教育は、親の関心・選択が優先する。そこには教育熱心な恵まれた家庭というエリート感が満たされる場でもあり、それが華麗なる一族への第一歩と勘違いする親も多い。

中高一貫教育に振り回されているゲーム好き、競争好きの平成生まれ・育ちの世代はすでに教育格差そのものの中で教育を受けているのであるから、ますますエスカレートするのは目に見えている。進学受験競争にはじめからあきらめるあるいは参加しないといった中高生も多くなっているようだ。

—中学校の数(私立、中学、一貫教育中学など)—

区分	計	国立	公立		私立	計のうち中高一貫教育を行う学校(再掲)	
			うち分校			併設型	連携型
平成9年度	11,257	78	10,518	72	661
14	11,159	76	10,392	76	691	26	89
15	11,134	76	10,358	74	700	50	133
16	11,102	76	10,317	76	709	70	156
17	11,035	76	10,238	75	721	80	171
18	10,992	76	10,190	71	726	98	177
19	10,955	76	10,150	73	729	160	172

資料:文部科学省「学校基本調査」

◆学習塾・予備校狂騒曲。ゆとり教育への反発か？

学習塾は、昭和40年代より急激にその数を伸ばし、現在ではなくてはならない存在になっている。学習塾に行くことが流行り始めた時期は、塾に行っていない子供を「未塾児」と言っていたが、小中高生の多数が学校と塾・予備校を掛け持ちしており、心身への悪影響が心配されている。塾が流行っている一因に、公立学校のゆとり教育への不安感がある。このゆとり教育の結果、塾へ行かない子供との学力の格差がますます広がることを危惧する見解がある。学習塾を取り巻く環境としては、少子化、

通塾率(単位:%)	
学年	通塾率
小学校6年生	35.6
中学校3年生	62.5
高校2年生	12.7

2003年4月 文部科学省

中高一貫校の増加により対象が減少しているが、一方で通塾者の低年齢化、家計から学習塾への出費額の上昇による市場の拡大傾向が見られる。

学習塾費用		学習塾へ費用を払っている生徒の割合(%)	支出者平均額(千円)
小学校	公立	43.3	142
	私立	68.2	287
中学校	公立	71.6	246
	私立	53.6	221
高校(全日制)	公立	35.3	224
	私立	42.9	337

『平成18年度 子どもの学習費調査』文部科学省

ゆとり教育

1982年(平成4年)9月から第2土曜日が休業日に変更。1995年(平成7年)4月からはこれに加えて第4土曜日も休業日となった。1998年(平成10年)～1999年(平成11年)の文部省は、学習指導要領の全部を改正し、2002年度(平成14年度)から「ゆとり教育(学習内容、授業時数の削減。完全学校週5日制、総合的な学習時間の新設、絶対的評価の導入)」を実質的に開始した。

◆進学予備校のターゲットにされる現役高校生

明治時代の旧制高校・旧制専門学校の設置以来、予備校は存在しており、最も歴史の古いものには、研数学館、駿台予備学校などがある。今日の大手予備校は概ね1950年代の中盤から後半にかけて作られている。戦後の高度経済成長期頃から、大学受験の大衆化が進み、河合塾や代々木ゼミナールなどの大手予備校が急成長する下地が生まれた。

団塊ジュニア前後の世代のいわゆる受験バブルの時代においては、現役よりもむしろ浪人して大学進学することが一般化。予備校は若者の一種の通過儀礼としての役割を果たし、独自の予備校文化も形成されるに至った。しかし、1990年代後半に入り、バブル経済の崩壊、少子化の進展につれて、浪人生の数は減少し、予備校は全体としては、浪人生を中心とした本科から、現役生を対象とするコースへと重点を移す傾向にある。現状の大学受験予備校は、近年は高校と同時に通う現役生用予備校も増えている。現役高校生が狙われているが、いまどきの高校生は気も変わりやすく、心をつかむのはそれほど簡単ではない。

VI. いまどきの中高生② 携帯で「自由自在」を身につけた

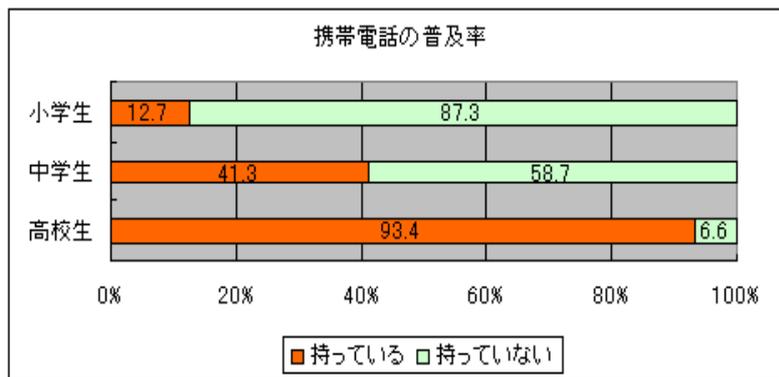
携帯は命。自分が消耗品になりつつある。

携帯電話は1990年後半から急速に普及し始め、2007年5月では契約数は9700万。計算上では、ほぼ日本人全員が1台ずつ持っている。利用方法も単に通話のみならず、メールやカメラの利用が当たり前のようになり、最近ではICチップを搭載しておサイフ携帯として買い物に使えるようになったり、定期券や切符などの代わりに使えるようになったり、更には映画のチケットを携帯電話にダウンロードすると会場の読み取り専用機にかざせば、チケット要らずで入場できたりと、どんどん携帯電話は進化し続けている。その携帯電話をいまどきの中高生はどのように利用しているのかを見ながらいまどきの中高生の生活ぶりを観察する。

携帯電話は、親も認める中高生の生活必需品

◆携帯電話の利用実態

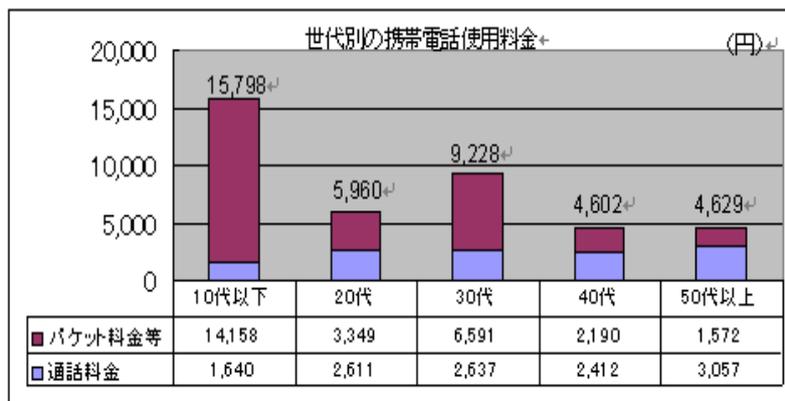
中学生の約半数が、そして高校生ではほぼ全員が携帯電話を保有している



「情報モラルに関する調査報告書」(平成17年3月、財団法人コンピュータ教育開発センター)

◆電話使用料金

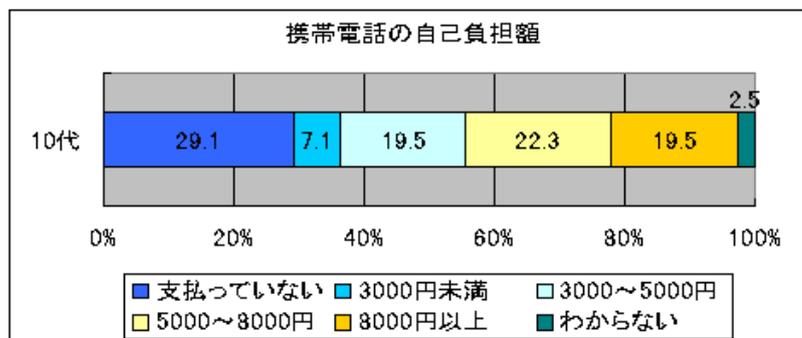
月々の平均利用料金は10代の子供たちが突出して高い。利用形態を見ると音声通話はむしろ少なく、メールやインターネット、着うたやゲームなどの非音声系サービスが多いのが特徴。



「平成18年度情報通信白書(総務省)」

◆携帯電話の自己負担額

約3割の子供が自分では支払っておらず、1ヶ月あたりの平均利用料金が15,000円を超えていることを考慮に入れると、大抵の子供が親に負担してもらっている。



「モバイル社会白書 2006 一般向けモバイル利用調査」

使いこなし使い切るが、振り回されている感じ

◆中高生の半数以上が、「ケータイに振り回されている感じ」

- ①中高生が1日に携帯電話を利用する時間 5時間以上25%、2時間までが23%
- ②友だちからメールへの返信 「即答」37%、「5分以内」「10分以内」ともに18%
- ③友だち関係 「つながりの浅い友だちが増えた」42%、「遊びや勉強など目的別で友達と付き合いようになった」が27%、「本音が言える友達が増えた」が24%
- ④携帯メールで自分だけにメールが来ない「メール無視」をされたことのある人は22%
悪口をメールでまわされた経験のある人は12%
- ⑤ケータイに振り回されていると感じる人は59%

*エンタテインメントポータルサイト「GAMOW」と朝日新聞社が実施した中高生の携帯利用に関するアンケート調査

(2007年7月 GAMOWの中高生ユーザー対象)

◆携帯のネット機能利用は、中学生は56.3%、高校生は95.5%

- ①ネット利用
 - ・PCでネットを利用 中学生は68.7%、高校生は74.5%。
 - ・携帯電話の利用率 中学生が57.6%、高校生が96.0%で、
 - ・携帯のネット機能利用 中学生は56.3%、高校生は95.5%
- ②PCネットの利用内容
 - ・「ホームページやブログを見る」(中学生:66.8%、高校生:68.5%)
 - ・「宿題を調べる」(中学生:51.0%、高校生:48.5%)
 - ・「メールする」(中学生:33.9%、高校生:28.1%)
- ③携帯電話ユーザー
 - ・メール機能利用 中学生が96.5%、高校生が98.7%)

- ・「ホームページやブログを見る」中学生:66.9%、高校生:78.2%)
- ・「あやしいリンクをクリックしない」(中学生:64.0%、高校生:66.8%)
- ・「むやみにダウンロードしない」(中学生:51.9%、高校生:50.0%)

* 内閣府情報化社会と青少年に関する意識調査 07 年」(中学生 451 人、高校生 396 人から回答)

◆メアドもアクセサリ＝消耗品感覚。飽きたらメールアドレスを変更する。

1 日のメール受信数「41 通以上」が 30%。

- ①メールアドレスを変更した経験 94% (1 年に複数回アドレスを変更もほぼ 5 割)
- ②変更回数 「2～3 回」(34%)、「1 回」(32%)、「4～6 回」(23%)、「10 回以上」(7%)
女子の方が男子よりも回数が多い傾向
- ③変更のタイミング 「1 年に 1 回以下」が半数、「半年に 1 回くらい」(31%)、「2、3 カ月に 1 回くらい」(13%)
- ④アドレスの変更理由 「なんとなく飽きたから」「メルマガなど迷惑メールがウザかったから」「環境が変わったから」「友達、彼氏・彼女が変わったから」という順
- ⑤1 日のメール受信数 「41 通以上」(30%)、「11～20 通」(19%)、「6～10 通」(18%)、「21～30 通」(15%)、「1～5 通」(10%)の順
- ⑥携帯の保有年数 15 歳の「1 年未満」が 44%と最も多く、携帯を持ち始める年齢は 15 歳が最も多いとみられる。 * バンダイネットワークスなどが携帯電話向けポータルサイト「GAMOW」で行ったアンケート調査(13 歳から 18 歳の中高生を対象 2008 年 5 月)

いまだき中高生話題チェック①

中高生と読書

不読率:高校生 52%。ネットの影響か? 雑誌離れが続く。

◆本の読書量 調査月(5月)の1カ月間で読んだ本(教科書、参考書、マンガ、雑誌等を除く)

- ①中学生が読んだ平均冊数3・9冊で過去最高。高校生は1・5冊
- ②一冊も本を読まなかった割合(不読率)は、中学生は15%、高校生は52%
- ③朝査月の5月に読んだ本 男女学年を問わず「バッテリー」(あさのあつこ著)、「ホームレス中学生」(田村裕著)など、映画やテレビドラマ化された作品が広く読まれた。

◆雑誌の読書量 雑誌離れ

- ①5月1カ月の平均の雑誌読書量中学生は3・4冊、高校生は2・7冊
⇒雑誌の読書量は86年をピークに減少が続く
- ②一冊も読まない中学生35%、高校生38%
⇒中高生は過去最高の数字で、雑誌離れの傾向は強まっている。
- ③読まれている雑誌(第一位) ・男子は小中学生以上は「週刊少年ジャンプ」。
・女子は、中1「ピチレモン」、中2～高1「SEVENTEEN」、高2「Popteen」、高3「non・no」
⇒男子はマンガ、女子はファッション誌が上位を占める

* 毎日新聞が全国学校図書館協議会(全国SLA)の協力を得てまとめた「第54回学校読書調査」

VII. いまどきの中高生の非行・犯罪

「軽さ」と「重さ」にブレ、二極化する中高生の非行・犯罪

最近のマスコミは、中高生の殺人、無免許運転などが、犯罪行為やその手口が大人顔負け、いや大人の想像を超え想定外であること、また、その動機が不可解であるがゆえに、大げさに報道している。

そして、いつものごとく、青少年の犯罪は、その時代の「社会の鏡」として1ヶ月もすれば棚上げにされる。現在の青少年の犯罪は社会の鏡ではない。未来の日本を見せる顕微鏡なのである。

なぜなら、現代の中高生は、体も頭も大人なのである。中高生の犯罪行為は、我々は「親のペットではないな」と言う叫びなのではなかろうか。大人化と子供化に揺れ動く中高生の犯罪を見る。

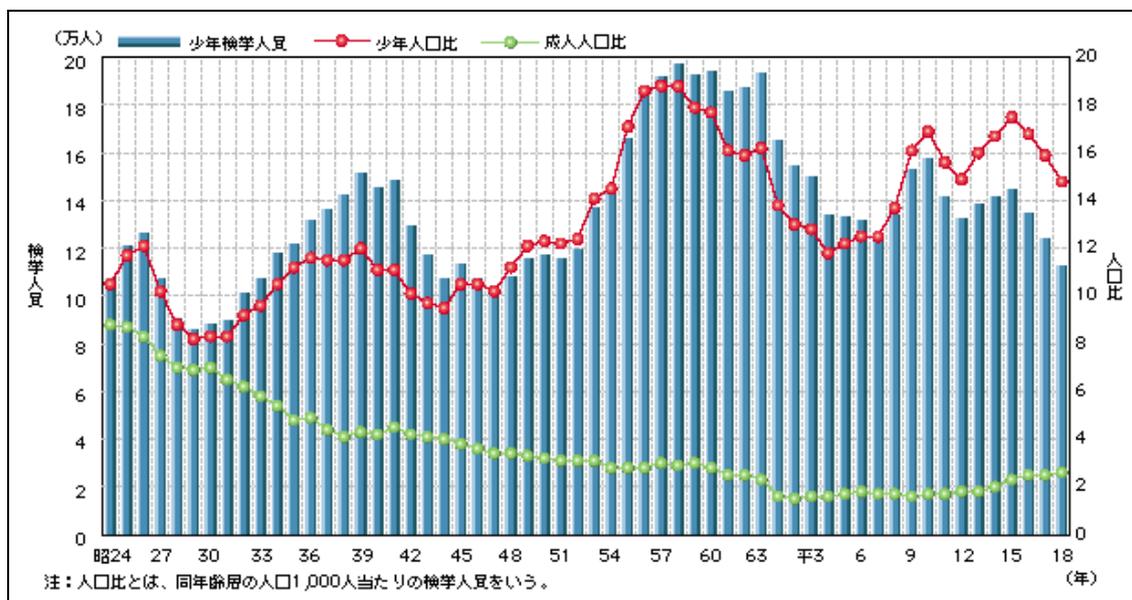
平成も20年間を経過。少年犯罪に第四の波がやって、きたー！

少年犯罪(少年非行検挙人数)は、昭和26年の16万6,433人をピークとする第一の波、39年の23万8,830人をピークとする第二の波、58年の31万7,438人をピークとする第三の波という三つの大きな波がある。

第一の波(昭和26年前後)

戦後の混乱期で道徳どころか、食うのに困れば、盗みを働くといった少年(当時は高校進学もできない)が多く、強盗事件が多かった。

—非行少年の検挙人員、人口比の推移(昭和24～平成18年)—



非行少年・・・犯罪少年[刑法(殺人・強盗、窃盗など)、特別法犯(銃刀法、薬物犯罪)

触法少年(14歳未満の者)、虞犯少年(家出、不純異性交遊など)

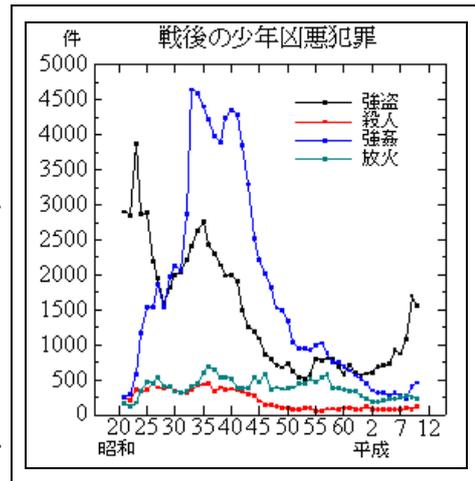
資料：警察白書「平成19年」

第二の波(昭和 39 年前後)

昭和30年代後半から高成長期を迎えるが、一方で、団塊世代(昭和23～25年生まれ)が中高生になった頃。膨大な数の中高生を前にして、教育界も政財界も家庭も少年の生活を落ち着かせる精神的余裕や金銭的余裕が無かった時代。

第三の波(昭和 58 年前後)

昭和50年代末から60年代は、日本の社会は高成長から安定成長経済に移行し、「レジャー・娯楽、ファッションなどで自由と個性を楽しむ豊かな生活志向が進んだ。中高生の生活活動も活発化し、社会も中高生を消費者として受け入れはじめた時代。当時の中高生犯罪は、暴走族、銃刀法違反、薬物犯罪、不順異性行為などが増え検挙人員数は過去最高を示すが、凶悪犯の殺人や強盗は減っている。

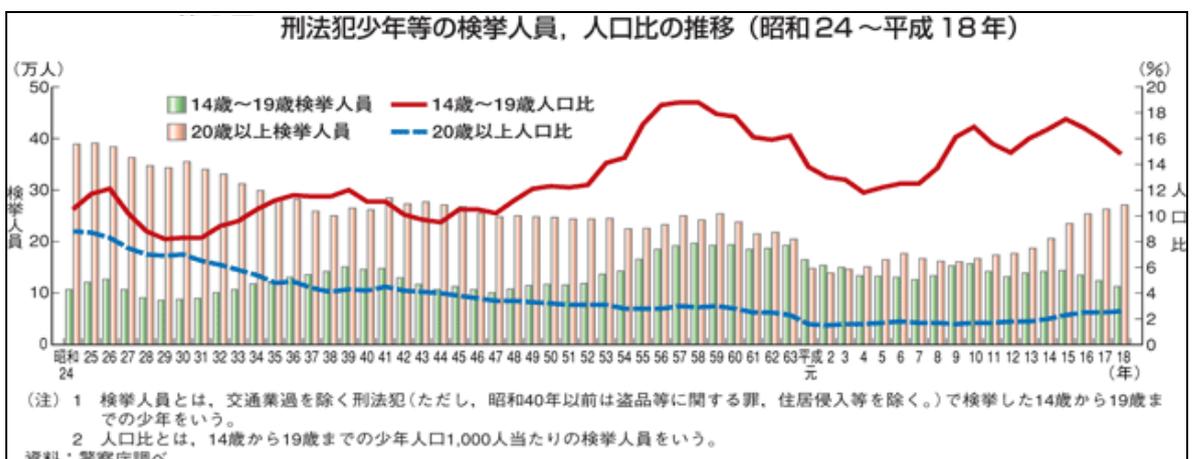


最近(第四の波)の中高生の非行と犯罪

少年非行検挙人数は、平成時代に入り、低下傾向にあるが、不良行為少年(深夜徘徊や喫煙など)の補導人員は増えている。

一方、強盗、殺人などの刑法犯は、平成2年は過去最低の件数を記録したが、その後増え続け、最近では、男子高校生が交際相手の女子中学生とトラブルになり、頭部を棒で殴って殺害したり、自宅に放火して全焼させ、就寝中の家族3人を殺害したり、女子生徒が寝込んだ父親を刺し殺すなどどう恐ろしい事件が多発している。

現在、少年非行・犯罪は、不良行為などの気軽な非行と多くはないが殺人・強盗などの犯罪行為とに、二極化が進行している。



—不良行為少年の補導人員の推移(平成9～18年)—

区分	年次	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
補導人員(人)		814,202	928,947	1,008,362	885,775	971,881	1,122,233	1,298,568	1,419,085	1,367,351	1,427,928
	深夜はいかい	257,443	297,175	328,248	307,112	370,523	475,594	577,082	669,214	671,175	719,732
	喫煙	384,508	453,853	492,372	417,053	437,988	480,598	542,214	575,749	545,601	557,079
	その他	172,251	177,919	187,742	161,610	163,370	166,041	179,272	174,122	150,575	151,117

不良行為少年・・・非行少年には該当しないが、飲酒、喫煙、家出等を行って警察に補導された20歳未満の者をいう。資料;警察白書

いまだき中高生話題チェック② 中高生と喫煙(タバコ)

喫煙中高生、3割がタバコ代月3000円以上
喫煙率は中学生男子2.3%、高校男子9.7%

①1カ月に1日以上、喫煙する中高生は、中学(男子2.3%、女子2.0%)、高校(男子9.7%、女子4.7%)
⇒喫煙率は平成8年度の調査開始以来、最低。

②喫煙者のうち直近1カ月のタバコ代3000円以上1万円未満が22.3%。1万円以上が6.8%。「買わない」12.5%。
⇒人や先輩からもらったり、親のタバコを“拝借”。

③1000円になったら、喫煙者の41.9%が「やめる」。28.6%が本数を減らしたり、安い銘柄に変えるなどして「喫煙を継続する」と回答。
⇒若年層の一部には喫煙習慣が根付いていることも判明

*調査は2007年12月～2008年2月。約9万人から回答。厚生労働省研究班

親も荒れていた80年代に育った中高生の非行と犯罪

昔は生活苦から、やむにやまれず犯罪に至る少年が多かった。しかし、今は豊かになったにもかかわらず、アニメやゲームの影響で心が貧しくなり、執拗で病的な少年犯罪が多くなった。また、現代の少年はキレやすく、ちょっとしたことに我慢が出来ず、重大事件を起こしている。

しかし、話は終わらない。今後、少年犯罪は増え続けることは間違いない。すでにその兆候が見えてきている。それは、青少年犯罪の犯罪行為の前兆である「小中高校の暴力行為」の実態である。

07年度の「問題行動」に関する文部科学省の調査によると、全国の小中高校生による暴力行為の発生件数が07年度、過去最多の52756件(前年度比18.2%増)に上り、幅広い年代で暴力が深刻化している実態が浮き彫りになったのである。

常識や理解を超えるところに少年の犯罪非行行為があり、昔の少年犯罪には、現在の犯罪より病的ではなからうかと思える事件がたくさんあった。少年特有のキレやすさも大して変わらないが、やはり、「少年の心の闇」というキーワードにたどり着く。

いまだきの中高生は、「親も『荒れた80年代』に育ち愛情を注がれずに育った自己肯定感のない子」(毎日新聞11.20記事)と認識されている。いまだきの中高生をどう育てて行くのか、非行や暴行に走らせないためにはどう対応するのか、極めて難しい問題がそこにはある。親に警鐘が鳴らされている。

いまどき中高生話題チェック③

中高生の金銭感覚 甘い日本の中高生

①親子の会話はアメリカに比べ、日本はかなり少ないー例外は進学のみー

アメリカでは、親と子が、経済生活に関する項目の一部を除き、80%以上とバランスよく話す。

日本では進学のみが94%と突出。日本では生活一般や家計について、家庭内での会話が少ない。家庭での経済や金銭に関する実践的教育があまり行われていない。

②誰もが無条件で小遣いを貰っている日本に対し、アメリカでは小遣いは労働の対価

日本では、中高生のほぼ9割が親から小遣いを貰っている。アメリカの生徒は、どの年齢も約4割しか貰っていない。アメリカでは8割の親は小遣いを与える際に何らかの労働を要求し、中高生に安易に金銭を渡していない。

③「アルバイト」についてはアメリカが日本の2倍

16～17歳の生徒のうち、アルバイトをして収入を得ているものは日本が30%、アメリカが58%

④「アルバイトで得たお金を貯蓄するか」アメリカ9割、日本5割

アルバイトで得たお金を貯蓄する割合は、日本では手伝い収入を貯蓄する中学生が40%、アルバイト収入を貯蓄する高校生が60%。アメリカでは90%を超える子どもがアルバイト代を貯蓄。

*社)日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会「日本の家庭、学校における金銭・経済教育の実情や課題を明確するための、中高生を対象としたアンケート調査」から

執筆者コメント

自分自身や周囲の変化に敏感で即行動に移す能力は誰より図抜けている

1990年代後半から今日までの日本では金融危機・国際化や情報化の進展に伴い、従来のような長期安定的な社会から過剰流動的社会にシフトした。そのような中、自身の既得権益の保護に汲々とする生活保守主義が蔓延している。その社会で、現在の中高生は何を考え、何をしようとしているのか。

寝ている親を刃物でさす中学生。友人を殺害して放火する。無免許運転で道路を走り回る。何をやっても無感動。何か欲しければアルバイトで稼ぐ。親も子供から金を借りるご時世。

この現代の中高生を生み、育て、一緒に生活しているのは、日本の最も荒れた80年代後半からのバブル経済とその崩壊、平成の長期不況を経験し、当人も荒れてしまった親たちである。

80年代後半からパソコンや携帯電話が普及する中、その子供達は、ゲームやパソコンを使いこなす中で、バーチャルな生きる知恵を身につけてきた。みんなロボットみたいになった。みんなアトム達の世界の住人になってしまったのである。親も社会も病んでいると言う事が理解できぬまま、中高生になってしまい、インターネット社会の進展は、情報社会での「中高生の大人化」と「大人の子供化」を促している。

消えない昔からの親子世代格差と今日の情報格差という二つの格差は、複雑に絡み合い落としどころの見えない坩堝に入っている。

甲子園高校野球の勝利監督インタビューで「子供たちが……」という発言を聞いた時に、何か気味悪く耳に響く。いまどきの中高生は子供じゃないのに、である。いまどきの中高生は、人間ロボットみたいだが、人の言うなりにはならない。自分自身や周囲の変化に敏感で即行動に移す能力は誰より図抜けているのだ。

[記・立澤 08. 11.24]

いま(今)どきの中高生レポート 了